

要旨

話し手・聞き手を指示する人称代名詞以外の語である、代名詞代用語の研究は個別言語レベルにとどまり、多言語の対照はあまりない。理論的分析は、McCready (2019) により始まったばかりである。本稿では、日本語、マレー語、インドネシア語の3言語を対照し、代名詞代用語になりやすさの階層「固有名、固有名+敬称 > 普通名詞、普通名詞+敬称 > 敬称」の存在、代名詞代用語になれる普通名詞が敬称の持つ意味を内在することを指摘する。さらに、McCready の分析に対する修正を提案する。[1] 敬称が必須の普通名詞+敬称のために、特性を取る敬称を追加する。[2] 過剰生成の問題を防ぐため、普通名詞 (+敬称) を代名詞代用語にするタイプ変換子 R の適用条件を具体的な語の表現的意味に言及するものにする。[3] McCready の扱わない、敬称の代名詞代用語のために、新たなタイプ変換子 R^+ を導入する。

1 はじめに

代名詞代用語 (pronoun substitute) とは、(1) の括弧内の表現のように、話し手・聞き手を指示する人称代名詞以外の語をいう。

- (1) a. («困ったら、私に聞いて下さい」の意で)
困ったら、{田中 / 先生} に聞いて下さい。
- b. («そのコップはあなたのです」の意で)
そのコップは {田中 / 田中さん / 先生 / 駅員さん} のです。

代名詞代用語は、東・東南アジアの言語に広くみられる現象にもかかわらず、その研究は個別言語レベルでの事実の記述にとどまり、多言語の対照はあまりない。理論的分析は、McCready (2019) により始まったばかりである。本稿では、日本語、マレー語、インドネシア語の3言語を対照し、代名詞代用語になる要素とそのなりやすさをまとめる (第3節)。その上で、McCready (2019) の問題点を指摘し、その意味分析に対する追加・修正を提案する (第4節)。

2 代名詞代用語と人称詞

代名詞代用語の現象に対して用いられる用語に「人称詞」(鈴木 1973) という用語がある。本論に入る前に、2つの用語の相違を明らかにしておきたい。人称詞は、代名詞代用語よりも広い概念を表す。2つの概念の関係は、次のようにまとめられる。

- (2) 代名詞代用語 = 人称詞の代名詞的用法のうち一人称・二人称の非代名詞

3つの違いがある。[1] 人称詞には代名詞代用語を含む代名詞的用法の他に、呼格的用法もある。

- (3) では、「皆さん」も「皆さんたち」もどちらも人称詞であるが、代名詞代用語は後者だけである。

- (3) 皆さん、今日は皆さんたちのおかげで、楽しい時間を過ごせました。

[2] 人称詞には、一人称（「自称詞」）、二人称（「対称詞」）の他に、三人称（「他称詞」）も含まれる。[3] 人称詞には代名詞も含まれる。

「代名詞代用語」という用語は、Sneddon et al. (2010) がインドネシア語の記述において用いているものである。インドネシア語の代名詞は、オーストロネシア祖語に由来し、その後、借用等により新たな語が加わったものの、基本的には閉じたクラスである。インドネシア語には人称による動詞の屈折はない。しかし、代名詞専用の統語環境が存在する。それは、裸受動文（bare passive ; 「受動態 2 型 (passive type 2)」とも）と呼ばれる構文の動作主位置である。代名詞代用語は、代名詞ではないものの当該統語環境、すなわち動詞語幹の直前に生起できる。(4a) で 1 人称代名詞 **ku=**が生起する位置に、(4b) では固有名 **Tini** が代名詞代用語として生起している。

(4) インドネシア語の裸受動文 (Sneddon et al. 2010:258–259)

- a. **Buku ini sudah ku=baca.**
book this already 1sg=read
「この本は僕はもう読んだ。」
- b. **Buku itu sudah Tini kembalikan.**
book that already Tini return
「その本はティニ (=私) はもう返した。」

3 代名詞代用語になる要素となりやすさ

潜在的に代名詞代用語になる要素には、①固有名、②固有名+敬称 (title)、③普通名詞、④普通名詞+敬称、⑤敬称の 5 つがある。日本語の「お母さん」、「お兄ちゃん」、「奥様」などのように、敬称なしでは使えず、④普通名詞+敬称の形で固定化したものもある。また、代名詞代用語となる普通名詞は通常、敬称化が可能である。マレー語(5a)、インドネシア語(5b) では、敬称化の際に短縮を伴うことがある*¹

(5) 敬称化に伴う短縮

- a. profesor 「教授」 → Prof. 「教授」; kakak 「姉」 → Kak 「姉さん」
- b. bapak 「父」 → Pak 「さん (男性)」; ibu 「母」 → Bu 「さん (女性)」

敬称専用の形式は、特性を表すことができない点で、普通名詞と区別することができる。

- (6) a. **Siti adalah se-orang {kakak / *Kak }.**
Siti COP one-CLF sister Ms.
「シティは {姉 / *さん} だ。」

*¹ 呼びかけに用いられるのは普通、短縮化した形式である。さらに、インドネシア語では、敬称化した形式は代名詞代用語にならない (Sneddon et al. 2010:66)。

- b. Tini adalah se-orang {ibu / *Bu }.
 Tini COP one-CLF mother Ms.
 「ティニは {母 / *さん} だ。」

実際に代名詞代用語となれる語種は、言語により異なる。

(7) (「そのコップはあなたのです」の意で)*²

- a. そのコップは {田中 / 田中さん / 先生 / 駅員さん / *さん} のです。
 b. マレー語

Cawan itu {Tanaka / Encik Tanaka / cikgu / tuan hakim / encik} punya.
 cup that Tanaka Mr. Tanaka teacher Mr. judge Mr. poss
 「そのコップは {田中 / 田中さん / 先生 / 裁判官様 / *さん} のです。」

- c. インドネシア語

Gelas itu milik {Tanaka / Pak Tanaka / bapak / #Pak guru / *Pak }.
 glass that possession Tanaka Mr. Tanaka father Mr. teacher Mr.
 「そのコップは {田中 / 田中さん / お父さん / *先生さん / *さん} のです。」

代名詞代用語になりやすさについて、(8) のような階層が指摘できる。

(8) 代名詞代用語になりやすさの階層

- ①固有名、②固有名+敬称 > ③普通名詞、④普通名詞+敬称 > ⑤敬称

①固有名と②固有名+敬称は、すべての言語で制限なしに可能である。ただし、敬称の持つ「聞き手を敬う」という性質上、②固有名+敬称は話し手に対しては用いられないということはある。③普通名詞もすべての言語で可能だが、各種制限を伴う。すべての普通名詞が代名詞代用語になれるわけではない。代名詞代用語になれるのは、社会的場面での役割を表すか(例:「先輩」)、そこから派生した特性を表すもの(例:(親戚でない)「おじさん」)に限られる。インドネシア語では、ほぼ親族名称に限られる。日本語ではさらに、敬称の持つ意味を内在している語でなければならない。(9a)に見られる容認性の差は、このことによる。敬称の意味を内在していない普通名詞は、(9b)のように、敬称を付けることで代名詞代用語にすることができる。

(9) (「さっきあなたと話してた人、誰ですか?」の意で)

- a. さっき {課長 / *店員 / *母 / *バイト} と話してた人、誰ですか?
 b. さっき {課長さん*³ / 店員さん / 母さん / バイトさん} と話してた人、誰ですか?

④普通名詞+敬称は、日本語とマレー語のみ可能で、インドネシア語では三人称の解釈しかない。

*² 例文は TUFSA Asian Language Parallel Corpus (TALPCo) (Nomoto et al. 2018) の文 3289 に基づく。

*³ 自らの上司としての課長に対しては不自然だが、そうでない課長の職階を持つ人物に対しては問題なく用いられる。

⑤敬称が単独で代名詞代用語になれるのは、マレー語のみであろう。現代日本語の敬称には、「さん」や「様」のような拘束形式と「陛下」や「先生」のような普通名詞が敬称化したものがある。前者が代名詞代用語になることはない。後者は代名詞代用語になるものの、それは普通名詞としてである可能性が高い。

4 分析

4.1 McCready (2019) の分析

代名詞代用語の先行研究はもっぱら、鈴木 (1973) のような社会言語学的分析や田窪 (1997) のような個別言語研究が中心である。通言語的に適用可能な理論的分析は、管見の限り、McCready (2019) により始まったばかりである。McCready は、日本語とタイ語で可能な①～④のパターンを扱う。その分析は、マレー語・インドネシア語にも適用できる。

まず、敬称は真理条件的意味はなく、表現的意味（具体的には規約的含意 [Conventional Implicature; CI]）のみ持つと分析される。その意味タイプは、 $\langle e, t \rangle^c$ 、すなわち CI 次元における^(c)、特性 ($\langle e, t \rangle$) を表す。(10) は、McCready の英語の敬称 Mr. の分析である。括弧内の注釈は筆者が付したものである。マレー語の Encik、インドネシア語の Pak にも同じ分析が適用できる。

$$(10) \quad \llbracket \text{Mr./Encik/Pak} \rrbracket = \lambda x [\text{masc}(x) \wedge \mathcal{R}_{\langle s_C, x \rangle} [.6, 1]] \quad \langle e, t \rangle^c$$

(Mr./Encik/Pak が付される人物は、男性であり、文脈 C における話し手 s とその人物の関与する使用域はフォーマルである。)

表現的意味は真理条件的意味とは独立したものであるから、①固有名(11a) も②固有名+敬称(11b) も真理条件的には同じ、固有名の意味を持つ。(11b) の表記では、 \blacklozenge の左側が真理条件的意味、右側が表現的意味を表す。

$$(11) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \llbracket \text{Yamada} \rrbracket = y \quad e^a \\ \text{b.} & \llbracket \text{Mr./Encik/Pak Yamada} \rrbracket = y \blacklozenge \text{masc}(y) \wedge \mathcal{R}_{\langle s_C, y \rangle} [.6, 1] \quad e^a \times t^s \end{array}$$

固有名は一般に直接指示的 (directly referential) であるとされるため、代名詞代用語として機能できるはずである。McCready はきちんと論じていないが、むしろ、直接指示的表現が代名詞代用語になれない場合に説明が必要なのである。筆者は、そのような言語や使用域では、話し手・聞き手を指示する専用の表現としての代名詞の存在が固有名 (+ 敬称) の使用を阻止していると考えられる。

次に、McCready の分析では、③普通名詞は、(12) に定義される、タイプ変換子 (type-shifter) R を適用することで、代名詞相当になる。

$$(12) \quad \text{指示的述語名詞へのタイプ変換子}$$

$$\llbracket R \rrbracket = \lambda P [a_C] \blacklozenge P(a_C) \quad \langle \langle e, t \rangle^a, e^a \times t^s \rangle$$

(R は特性を取り、文脈 C における指示表現 a に変換する。さらに、元の特性 P を a が満たすことを表現的意味として織り込む。)

ここでは、聞き手を表す a を想定しているが、指示表現は話し手になることも可能である。

「先生」は、先生であるという特性を表す(13a)。それに、 R を適用すると指示表現になる(13b)。

$$(13) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \llbracket \text{先生} \rrbracket = \lambda x[\text{teacher}(x)] & \langle e, t \rangle^a \\ \text{b.} & \llbracket \text{先生} \rrbracket = a \blacklozenge \text{teacher}(a) & e^a \times t^s \end{array}$$

(13b) は、(11b) と同じく、直接指示表現を真理条件的意味とし、表現的意味も持つ。よって、代名詞代用語として機能できる。

上述のように、敬称は真理条件的意味に影響を与えない。そのため、④普通名詞＋敬称と③普通名詞は真理条件的には等価である。よって、ともに代名詞代用語として機能できる。「課長さん」を例にとると以下ようになる。まず、特性を表す「課長」(14a)に R がかかり(14b)が導かれる。その後、敬称の「さん」の持つ表現的意味が加わり、(14c)が得られる。

$$(14) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \llbracket \text{課長} \rrbracket = \lambda x[\text{store.clerk}(x)] & \langle e, t \rangle^a \\ \text{b.} & \llbracket \text{課長} \rrbracket = a \blacklozenge \text{store.clerk}(a) & e^a \times t^s \\ \text{c.} & \llbracket \text{課長さん} \rrbracket = a \blacklozenge \text{store.clerk}(a) \wedge \text{person}(a) \wedge \mathcal{R}_{\langle sC, a \rangle} [.5, .9] & e^a \times t^s \end{array}$$

4.2 過剰生成問題

McCready (2019) は、代名詞代用語の意味分析の大枠を提示するものの、細かい点では問題が残る。最も大きな問題は、過剰生成である。(9a) を例にすでに見たように、すべての普通名詞が代名詞代用語になれるわけではない。

McCready もその点には気付いており、特性を表す名詞を指示表現に変えるタイプ変換子 R に対して、「十分に好ましい社会的受容性を持つ職業」のような適用条件を設定している。(9a) で「課長」は代名詞代用語になれるが、「店員」はなれないのはこのことから説明できる。(9b) に示したように、普通名詞だけでは代名詞代用語になれない語でも、敬称「さん」を付ければ代名詞代用語になれるということ事実は、敬称が加わることにより当該条件を満たすようになるからであると説明している。それについては筆者も賛同する。だが、McCready の提供する大枠だけでは、実際にそれを実現することは難しい。

「店員さん」を例に、この問題を示す。まず、「店員」は「課長」と違い、適用条件を満たさず、(15a) に R を適用することはできない。そこで、McCready の示唆するように、敬称「さん」を先に付加して(15b)とし、それに R を適用して(15c)を導きたい。しかし、(15a) は(14b) と違い、個体を外延としないため、(14c) と同じタイプの「さん」(16a) (cf. (10)) は使えない。そのため、特性を取るタイプの「さん」(16b)を追加する必要がある。

$$(15) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \llbracket \text{店員} \rrbracket = \lambda x[\text{store.clerk}(x)] & \langle e, t \rangle^a \\ \text{b.} & \llbracket \text{店員さん} \rrbracket = \lambda x[\text{store.clerk}(x)] \blacklozenge \lambda x[\text{person}(x) \wedge \mathcal{R}_{\langle sC, a \rangle} [.5, .9]] & \langle e, t \rangle^a \times \langle e, t \rangle^s \\ \text{c.} & \llbracket \text{店員さん} \rrbracket = a \blacklozenge \text{store.clerk}(a) \wedge \text{person}(a) \wedge \mathcal{R}_{\langle sC, a \rangle} [.5, .9] & e^a \times t^s \end{array}$$

- (16) a. $\llbracket \text{さん}_1 \rrbracket = \lambda x[\text{person}(x) \wedge \mathcal{R}_{(s_C, x)}[.5, .9]] \quad \langle e, t \rangle^c$
 b. $\llbracket \text{さん}_2 \rrbracket = \lambda P \lambda x[P(x)] \blacklozenge \lambda x[\text{person}(x) \wedge \mathcal{R}_{(s_C, x)}[.5, .9]] \quad \langle \langle e, t \rangle^a, \langle e, t \rangle^a \times \langle e, t \rangle^s \rangle$

2種類の「さん」が存在することは、(17)のような例がその証拠となる。

- (17) 鈴木さん₁は(アパレルショップの)店員さん₂だ。

過剰生成を引き起こす主因は、「十分に好ましい社会的受容性を持つ職業」という R の適用条件の設定が十分に厳密でないことである。例えば、代名詞代用語になれる「先生」やマレー語の *cikgu* 「(学校の)先生」の類義語の「教師」、*pensyarah* 「(大学の)先生、講師」は代名詞代用語になれない。これらは(ほぼ)同一の職業であり、社会的受容性の度合いにも違いはない。このことから、 R の適用条件が言及すべきなのは、職業ではなく、具体的な表現であると言える。第3節で、敬称なしに代名詞代用語になれる普通名詞には、敬称の意味が含まれていると指摘した。つまり、「先生」の意味は厳密には、真理条件的意味のみから成る(13a)ではなく、表現的意味を含む(18)のようなものと分析すべきなのだ。

- (18) $\llbracket \text{先生} \rrbracket = \lambda x[\text{teacher}(x)] \blacklozenge \lambda x[\mathcal{R}_{(s_C, x)}[.5, .9]] \quad \langle e, t \rangle^a \times \langle e, t \rangle^s$

R の適用条件は、使用域を規定する数値に言及する形で定式化することができる。「先生」の類義語「教師」は、真理条件的意味は「先生」と同じだが、表現的意味を持たないか、あるいは使用域を規定する数値が R の適用条件に合わないため、代名詞代用語になれないと分析できる。また、「教師」に敬称「さん」を付けても代名詞代用語にはなれないのは、類義語「先生」の存在による阻止効果のせいである可能性もある。

4.3 敬称が代名詞代用語となる場合

上述のように、マレー語では、⑤敬称が代名詞代用語として用いられる。McCready (2019) は、この場合を扱っていない。

- (19) Nama **kak** siapa?
 name Ms. who
 「姉さん(=あなた)の名前は何かですか？」(cf. (5a))

この事実を説明するために、敬称が表現的意味として持つ特性を、その特性を満たすような指示表現(真理条件的意味)にするタイプ変換子 R^+ を提案する。

- (20) 敬称から指示的述語名詞へのタイプ変換子
 $\llbracket R^+ \rrbracket = \lambda P[a_C] \blacklozenge P(a_C) \quad \langle \langle e, t \rangle^c, e^a \times t^s \rangle$

R (cf. (12)) と R^+ の違いは、前者が真理条件的意味の特性を取るのに対し、後者が表現的意味の特性を取る点である。 R^+ により⑤敬称は、④普通名詞+敬称と同種の意味を持つ。その結果、代

名詞代用語として機能する。敬称の Kak(21a) に R^+ を適用すると、(21b) のようになる。

- (21) a. $[[\text{Kak}] = \lambda x[\text{female}(x) \wedge \text{sibling.elder}(x) \wedge \mathcal{R}_{\langle sC, x \rangle}[.3, .7]]$ $\langle e, t \rangle^c$
 (Kak が付される人物は、自分の姉以上の年齢の女性であり、文脈 C における話し手 s とその人物の関与する使用域は中程度の格式度である。)
- b. $[[\text{kak}] = a \blacklozenge \text{female}(a) \wedge \text{sibling.elder}(a) \wedge \mathcal{R}_{\langle sC, a \rangle}[.3, .7]]$ $e^a \times t^s$

4.4 代名詞代用語になりやすさの説明

以上の議論から、第3節で指摘した、代名詞代用語になりやすさの階層(8)((22)として再掲)を説明することができる。この階層は、基本的意味から代名詞代用語を導く際に関与する意味演算の複雑さを反映すると考えられる。

(22) 代名詞代用語になりやすさの階層

- | | | | | |
|--------------|---|----------------|---|-------------|
| ①固有名、②固有名+敬称 | > | ③普通名詞、④普通名詞+敬称 | > | ⑤敬称 |
| タイプ変換なし | | タイプ変換 R | | タイプ変換 R^+ |

R^+ は二次的な意味である表現的意味から真理条件的意味を生み出すので、その逆である R よりも稀であると考えられる。

5 今後の課題

本稿では、日本語、マレー語、インドネシア語の3言語を対照して、代名詞代用語になりやすさの階層を指摘した。この階層の背後に4.4節で述べたような、意味演算の複雑さの違いがあるとすれば、この階層は普遍性を持つことが予想される。冒頭で述べたように、代名詞代用語は東・東南アジアの言語に広くみられる現象である。今後、他の言語からのこの階層の検証をしていきたい。

本稿では、代名詞代用語になれる普通名詞についても重要な指摘をした。4.2節の後半で論じたように、代名詞代用語になれるかどうかは、個別の語の意味、とりわけ表現的意味による。そして、代名詞代用語となる類義語との語彙間の関係もある。そのため、「任意の表現 E は代名詞代用語となるか？」という問いに答えるには、抽象的一般化をするだけでなく、個別の語を網羅的に調査していくことも必要である。

参考文献

- McCready, Elin. 2019. *The Semantics and Pragmatics of Honorification: Register and Social Meaning*. Oxford: Oxford University Press.
- Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi, and Hideo Sawada. 2018. TUFs Asian Language Parallel Corpus (TALPCo). 『言語処理学会 第24回年次大会 発表論文集』436–439.
- Sneddon, James Neil, Alexander K. Adelaar, Dwi N. Djenar, and Michael Ewing. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge, 2nd edition.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波書店.
- 田窪行則. 1997. 日本語の人称表現. 田窪行則(編) 『視点と言語行動』13–41. くろしお出版.